【ま・著】求めた永遠は砂粒となって

ことむま！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【ま・著】求めた永遠は砂粒となって

【Ｎコード】
Ｎ５８５８Ｖ

【作者名】
ことむま！

【あらすじ】
愛に貪欲で、ただ優しすぎた男の別れ話

（前書き）

【使用お題】曖昧な二人の１０の議題

＊０１　この距離
＊０２　なかったことにして
＊０３　瞼の裏
＊０４　悩み浮上
＊０５　つかずはなれず
＊０６　なんでだよ。
＊０７　歩幅、追いつけない
＊０８　接触範囲
＊０９　ひとり
＊１０　今日を抜け出そう

「今までのこと。なかったことにして」
急に宣告される彼女の台詞。
秋模様の人々が行き交い、枯れ葉が落ちて溜まる並木道。
人の声、足音、車や自転車から放たれる雑踏の中の喧騒。
だが、１mに満たない俺と彼女の接触範囲は、その空間だけぽっかり異次元に放り込まれたような静寂と沈黙に満ちていた。
「なんでだよ。なんでそんなこというんだよ」
静寂の中、自分の胸の鼓動が止まらないのに気付いたのは、寂しい涙で潤んだ情けない瞳で、わなわなと震える情けない口で、女々しく情けない台詞を吐いた時だった。
「なんでって。普通わかるでしょ。あなたと違う男と付き合ってたのよ。私は悪い女なの。君をだましていた悪い女。これが理由にはならないかしら？」
そうだ。こんなことになった理由。
彼女と付き合ってるのにも関わらず、独占欲の強い自分は、彼女の全てが知りたくて、全てを知ろうと彼女を追ったのだ。
ストーカー行為に等しい、ひとりぼっちの諜報活動結果。
知り得たのは別の男の影。
親しげに語り合い、時には自分に嘘をついてまでその男と密会を重ねる彼女。
浮上する悩み。
自分に足りないものを埋めれる存在に対する劣等感と、独占していたはずの彼女を盗られ湧き上がる強烈な嫉妬心はあったが、不思議と自分の怒りはすぐに終息した。
どうやっても追いつけない歩幅なら、なにも走る必要はない。
歩幅を狭めず、遠くに行かないように見ていればいいのだと、自分に言い聞かせた。

少しでもいい。
彼女に愛されてさえいれば、その愛の総量は少しでもいい。
嘘交じりかもしれない愛を拒みさえしなければ、つかず離れずの愛は永遠に続くと思っていた。
瞼の裏に浮かぶ親しげに話す男の影など、自分にとっては別に良かった。
ただ、彼女が少しでも自分を愛してくれさえすれば……。
だから自分は、自分から彼女に男の影を見たことを言わなかった。
言わないことで永遠を手に入れられるのなら、憎悪や嫉妬は抑えこみ、今までの『今日』を抜け出そうとすることなど容易かった。
「悪い女なんて嘘だ。君は、ただ愛が多いだけさ。それだけなんだ。だから別に僕は気にしないし、今まで通りの関係でいいと思うんだ」
そうしないと僕は……と言いかけて、自分の勇み足を止めた。
どうにか彼女との関係を続けようとする自分の姿。
それが彼女にどう思われるのか。
醜い。
醜くて、見苦しくて。
嫌われてしまう。
二度と会えないぐらいに嫌われてしまう。
そんなのは嫌だ。
嫌だ！
「僕は君の事を愛している。ハプニングはあったけど、それは今でも変わりはしない。君もそれを知って、僕と付き合ってくれている。そんな僕と付き合ってくれると信じている。君は、僕の愛で埋められない愛を他の人で埋めればいい。君の無限大に広がる愛を、それを求める皆にあげればいい。その中からほんのちょっと、僕にくれるだけでいい。それでいいんだ！」
自分の体に散らばっていた、かき集めたありったけの勇気と、彼女へのありったけの愛を、そのまま言葉に乗せて口に出した。
「ありがとう」

そういうと彼女は笑った。
どこかで救われた気がした。
たとえばそれが自分の愛に答えた満面の笑みでも、申し訳ないような苦笑いでも、自分にとっては最高の笑顔だった。
だが、その笑顔のまま彼女は言った。
「でもね私は悪い女なの。君は優しすぎるからそういうこと言うけど、普通じゃないと思うなそういうの。偽ってるのを承知で付き合えるほど私も図太くないし、君も私の愛っていう夢から覚めたほうがいいと思うのよ。ごめんね。ごめん。君の気持ち知っていながらこんなこと言う私卑怯よね。でもね。私、君のこと嫌いになりたくないし、嫌われたくもないの。贅沢なの。贅沢だから君の愛に答えられないの。私も、君を好きだって気持ちは同じ。でも。でもね。違うの。いつか互いに傷ついてしまうの。そんな悲しい思いをするのは嫌でしょ。私は嫌。だから……」
彼女の声で自分の耳に入る言葉。
愛されているのを確認できてはいる。
でも、何か、違う。
いつものように聞こえる彼女の甘い声。
でも、今のそれは、呪いの言葉のように重く、寂しくて、辛い。
熱がひき、寒々と凍りつくような自分の顔。
言葉の後、『だから』の先を聞いたらきっと、僕はかけがえのないものを失ってしまう。
「さようなら」
笑顔の縁でどこか寂しげな色を見せる彼女は、そういうと自分の前から逃げ出した。
あれはきっと彼女なりの優しさだと思った自分は、追いかける気持ちよりも先に、色を失った世界に絶望して、その場にへたりこんでしまった。
覚めないでほしい夢は覚め、喪失した現実だけが自分の心を支配していた。

自分に嘘をついてまで欲しいと思った愛という名の幸せは、永遠となるまえに砂粒となって流れて消えた。

そして、自分も……。

（後書き）

あえてベタベタなものは書きたくなかったけど、書いてたらベタベタだなぁ。
ベタベタというよりべちゃべちゃ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5858v/

【ま・著】求めた永遠は砂粒となって

2011年10月6日20時43分発行